

津波伝承まちづくりガイドライン
4つの考え方と取り組み例 [仮想市街地]

三陸に住み続ける
記憶を継承する
魅力を守り育てる
みんなで前に進む

まち全体で取り組むこと

新しい技術を取り入れる

- ・再生可能エネルギーシステム（太陽光パネル等）の導入
- ・基盤施設再構築の段階で自立・分散型エネルギーシステムの導入
- ・鉄道や路線バスの補完的交通手段としてコミュニティバスやデマンドバス等の運行

緑と水をつなぐ

- ・身近なまちの資源（中小河川や自噴井、寺社仏閣等）の保全・活用
- ・防災・景観・交流・環境等の複合的な機能を持つ緑と水のネットワークの形成

情報を共有する

- ・国・県・市町村による連絡調整会議の充実
- ・地域協議会等へまちづくり専門家の派遣 等

やることを明らかにする

- ・各事業スケジュールの統合化による全体スケジュール管理 等

仕組みをつくる

- ・事業内容や段階に応じて、地域の検討組織、コンペ等の仕組みを使い分ける

土地利用ゾーニングの凡例

- 住居
- 住居・店舗混在
- 田園集落
- 産業系（商業施設）
- 産業系（水産加工施設）

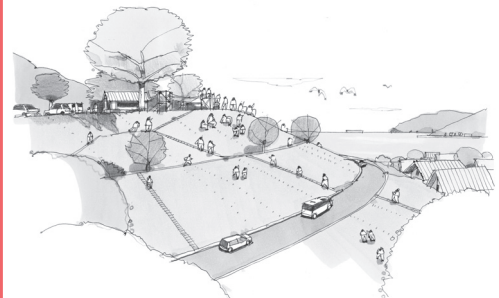
三陸の景観を守る

例
造成計画やデザイン計画を工夫することにより、魅力的な街並みの創出や法面等による圧迫感等の軽減、低地部からの景観・海への眺望に配慮



逃げる「道」をつくる

例
道路閉塞を避けるため沿道建築物や構造物の設置に配慮、夜間でも避難路が分かるように舗装カラーを工夫



経験や思いを伝える

例
津波避難の成功例や震災遺構などを題材として防災教育を充実

記憶や記録を残す

例
象徴となる構造物や樹木等を保全、津波浸水区域界を現場で表示



逃げる「場」をつくる

例
平常時の利用が可能な高台避難場所の整備、津波避難ビルの指定や避難機能の改善、公共施設と一体的な避難場所の整備

段階的にまちをつくる

例
高台住宅地の整備は、既成市街地に近く高低差の少ない場所から優先的に実施

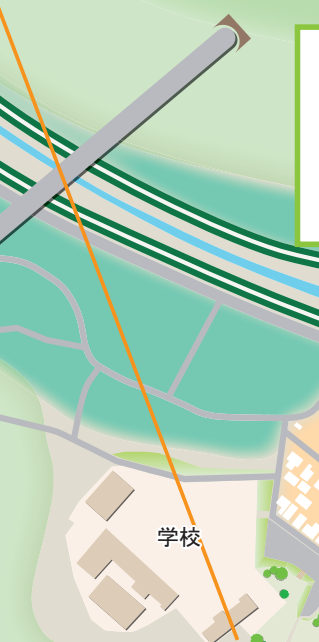


いきいきとした街並みを創る

例
街並み形成のためのガイドラインやルールをつくる、復興事業と周辺地域における境界部の一体性に配慮

みんなが使える拠点をつくる

例
学校と公園等のオープンスペースの併置



まちを広げすぎない

例
被災しなかった既成市街地にある農地や空き地などを宅地に利用



まちに「たまり」をつくる

例
歩行者ネットワーク沿いに大小のたまりの場を配置

段階的にまちをつくる

例
被害を受けた建物や土地を「玉突き」で動かし、最適な用地を確保

みんなが使える拠点をつくる

例
医療・福祉施設とその他の都市機能（行政、商業、コミュニティ等）の近接配置

ここにしかないものを活かす

例
被災前の特徴的な町割や路地等を継承

